

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770179

研究課題名(和文)中古中世歌合コーパスに基づく和歌評論の語彙論的研究

研究課題名(英文)Lexicology study of poetry critic based on corpus of Utaawase from the Heian period to the Kamakura period

研究代表者

富士池 優美 (FUJIIKE, Yumi)

中央大学・文学部・准教授

研究者番号：20510572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：歌合について、要素の多様性に注目した電子化を行い、形態論情報の整備を行い、「歌合コーパス」を構築した。これに基づき、品詞比率を調査し、和歌、散文それぞれの語彙の量的構造の解明を試みた。分析にあたり、形態論情報のほか、歌合特有の要素、文体、文境界等の情報を活用した。和歌については、和歌の内容により品詞比率に差があるが、この差は文章のジャンルを超えるものではないことが明らかになった。また、歌合日記については、「要約的な文章」の特徴を持ち、物語等の地の文とは異なること、特に名詞率が高いことが明らかになった。また、語数(音数)の制約や文の長さ以外に、名詞率の増加の要因が存在することが示唆された。

研究成果の概要(英文)："Utaawase corpus" is a corpus that is built by morphological annotations and digitization focusing on diversity of elements. In this study, I make an investigation into the constitution ratio of a part of speech based on "Utaawase corpus" and try to clarify the quantitative structure of vocabulary about poetry (waka) and prose in utaawase. About analyzing it, I use morphological annotations, special elements found only in utaawase, styles, sentence boundaries. The findings about poetry in utaawase shows a difference of ratio of a part of speech caused by thematic content of poetry, and it fall into neither category of text. The findings about prose in utaawase shows that utaawase nikki has a feature of "summarizing sentences". And it is different from other category of text such as descriptive part, especially revealed high ratio of nouns. In addition to the sentence length limitations and number of words in a sentence, suggesting that there is a factor that ratio of nouns increases.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 コーパス 歌合 和歌評論 品詞比率

1. 研究開始当初の背景

歌合とは、和歌を左右に分けてつがわせ、その優劣を判定した文芸的な遊戯であるとともに、その評論でもある。平安時代中期の遊楽の中で代表的な行事となり、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、特に高度な文芸的内容を持つ行事に発展した。本研究で対象とする中古中世の歌合は、和歌の実作に基づき、和歌のあり方や歌ことばの用法について評論が加えられた資料と言える。歌合の中で特に注目されるのが、和歌評論である判詞（歌の勝負の判定に関する評やそれに対する議論を記した部分）や日記である。判詞は平仮名漢字交じり文、和化漢文といった異なる文体を交えて、一つの論をなし、日記には和文と和化漢文が対になったものがある。

平安・鎌倉時代は和漢混淆文が一般化する過程にある。中古物語などの平仮名文（和文）についてはこれまでの日本語史研究の中心資料であるとともに、既に研究対象となっている。また、和漢混淆文についても、中古中世の説話を対象として、和漢の両系統の連続性の解明、文体的変異の構造を記述を目的とする研究が進められつつある。本研究の対象である歌合判詞は一種の和漢混淆文であるが、歌合判詞に見られるような文体の混在は中古中世の物語、説話等にはない特徴であり、歌合判詞は和漢混淆文が一般化する過程の実態を探るにあたり、語彙・文体の研究上重要な位置にある。

しかし、歌合には索引類がほぼなく、既存の電子化資料は紙面に基づく外形的な電子化であるため、言語研究を目的とした場合には不足があり、歌合の語彙・文体的特徴を捉えるのは困難であった。当時の言語意識を捉える材料としてのみ用いられてきた歌合であるが、判詞を和漢混淆文の一形態としてその語彙を記述する研究は進んでおらず、その方面の研究が求められていた。

歌合は序文・歌・判詞・日記といった多様な要素を持つ。これらの多様な要素の扱いの困難さが、歌合を対象にした語彙研究の進展を阻む一因であったと考える。このような多様な要素を持つ資料の電子化方法については、どの要素をどのように構造化するのが適切かということから、検討する必要があった。

2. 研究の目的

中古中世の歌合は、中古から中世にかけて和漢混淆文が一般化する過程において、和歌の実作に基づき、和歌のあり方や歌ことばの用法について評論が加えられた資料である。歌合のコーパスは、①和歌、平仮名漢字交じり文、和化漢文といった異なる文体が混在し、語彙・文体の研究上重要な位置にあること、②序文・歌・判詞・日記等、多様な要素を持ち、必要に応じた検索を可能にするコーパスのタグ付けには慎重な設計が求められること、この2点において重要なものである。

本研究では、中古中世の歌合に対して資料

の特性に応じた高度なタグ付けのあり方を検討し、品詞等の形態論情報を付与したコーパス（以下、「歌合コーパス」とする）を構築した上で、歌合判詞を和歌評論と捉える等、和歌のみならず散文箇所についても、その語彙及び文体の特徴を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 「歌合コーパス」の構築にあたり特に重要になるのは、要素の多様性に注目した電子化方法である。多様な様式を持つ歌合に対応可能とするために、中古中世の歌合のあり方を調査する。その結果に基づき、どの要素をどのように構造化するのが適切かということを検討する。

(2) 特に扱いが難しいと予想される和化漢文部分については、電子化、形態素解析用辞書への語彙登録等、和歌・平仮名文といった和文系の部分と同様に扱える方法を検討する。

(3) 上記の検討結果を受け、歌合テキストの電子化及び外形的要素、文体情報等の高度なタグ付けを行う。

(4) 電子化したデータをもとに、読み・品詞等の形態論情報の整備を進め、コーパスを構築する。

(5) コーパスを活用し、歌合の語彙的特徴を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 中古中世歌合の構造化の検討

「歌合コーパス」においては、序文・歌・判詞・日記の別といった歌合特有の構造に対し、可能な限り細かく情報を付与することとした。これによって、和歌と和歌評論等の散文の組み合わせと言える歌合を、和歌は他の資料の和歌と、判詞は歌論・歌学書と、序文は和歌集の序文と等、それぞれ比較するといったことが可能になる。「歌合コーパス」では、得られた用例がどの要素に属するものであるか、またその語の代表形・読み・品詞といった形態論情報を取り出せることを目指す。そのため、記述にはXMLを用い、既存、ないし、構築中のコーパスの仕様を参考に、歌合特有の構造にあわせて構造化し、最終的には表型データベースとして整備する。

「歌合コーパス」においては判詞という一つの要素の内部に和文と和化漢文が混在することが問題になる。これについては、和化漢文で書かれた部分に対して和文風表記になるようテキストの整形を行うこととした。具体的には、和化漢文中の一二点やレ点といった返り点が付されたものは、これを全て書き下した上でコーパス化した。また、形態素解析にあたり問題となる、表記が省略された部分の補読や、読まない文字のタグ付け、漢字で表記された助詞・助動詞を仮名に開くといった、漢文系統の文体のコーパス化において必要な処理を行うこととした。

歌合のコーパス化にあたっては、歌合の外形的要素の配置が一定しないため、自由度を持たせてマークアップする枠組みを設定することが求められる。要素の洗い出しにあたっては、歌合の規模を考慮に入れて検討を進めた。検討結果のうち、歌合特有の構造に関する要素の例を以下に示す。

budate 要素・dai 要素・ban 要素 <budate>は和歌集の部立にあたる、複数題をとりまとめた題を表す。<dai>は歌題を表す。<ban>は歌の番（左右で一对）をまとめたもので、@banID 属性（必須）で番の通し番号を記述する。題と番の対応は1対1の歌合もあるが、一つの題に複数番が対応する歌合もある。

syobu 要素 勝負を表す。左右のどちらか勝った方が「勝」となり、引き分けの場合は左方の syobu 要素が「持」となる。勝負を付けない歌合も存在する。

han 要素 判詞を表す。

nikki 要素 日記や歌合前後の贈答歌のような付属的な文章を表す。

(2) 「歌合コーパス」の構築

「天徳四年内裏歌合」「六百番歌合」については、国歌大観の歌番号のような、研究上必要な付加情報も併せて電子化し、外形的要素、文体情報等の高度なタグ付けを行った。そのほか、平安初期歌合 3 作品（「寛平御時后宮歌合」「亭子院女郎花合」「延喜十三年亭子院歌合」）、歌合中のまとまった散文箇所である序文・日記類 15 テキストについて、電子化及びタグ付けを行った。電子化したデータに対して、「中古和文 UniDic」を用いて形態素解析を行った上で、解析結果を人手修正し、読み・品詞等の形態論情報（短単位・長単位）を整備した。

形態素解析辞書「中古和文 UniDic」にない語・表記については、用語登録という形でフィードバックを行った。「歌合コーパス」整備を通して、「中古和文 UniDic」に提供した辞書データは、語彙素（辞書見出し）304、語形（活用型・清濁の差異といった異形態）353、書字形（異表記）756 となった。

(3) 歌合和歌の語彙の量的構造の解明

「歌合コーパス」のうち、和歌の要素を抽出し、付与した形態論情報に基づき、歌合和歌の語彙の量的構造について考察した。

和歌の品詞比率については、限られた音数の中での表現が求められるため名詞の比率が高いことが知られている一方で、一つのジャンルの中にも品詞比率にばらつきがあることも指摘されている。平安初期歌合と同時代の勅撰集を対象とし、『日本語歴史コーパス平安時代編』「歌合コーパス」（平安初期歌合 3 作品「寛平御時后宮歌合」「亭子院女郎花合」「延喜十三年亭子院歌合」）の長単位データに基づく名詞率と MVR を用いて、和歌の内容の違いの品詞比率との関係を検討した。MVR とは「100×形容詞類（形容詞・形容動詞・

副詞・連体詞）の比率／動詞の比率」の式で表される指標であり、名詞率と MVR の組み合わせから見出せる文体的特徴として、名詞率が高く MVR が小さいものを「要約的な文章」、名詞率が低く MVR が大きいものを「ありさま描写的な文章」、名詞率が低く MVR も小さいものを「動き描写的な文章」と位置づけることが提案されている。

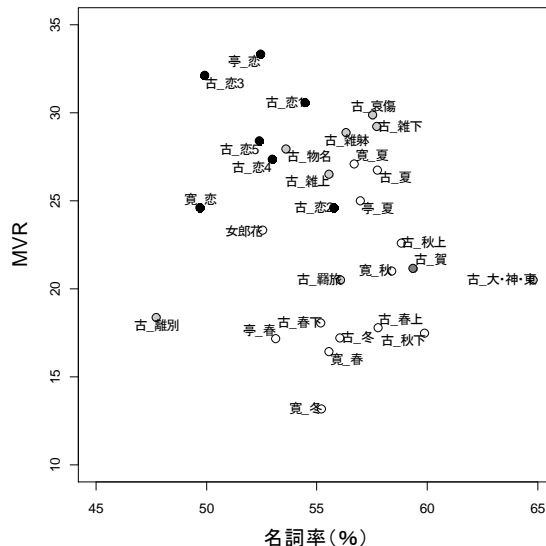


図1 資料・部立ごとの名詞率・MVRの散布図

調査結果として、図1に古今和歌集・平安初期歌合を対象とした、資料・部立ごとの名詞率・MVRの散布図を示す。テキストの特徴を示す名詞率とMVRの2指標に基づき、平安初期歌合3作品と同時代の勅撰集『古今和歌集』の和歌について、和歌の内容の違いと品詞比率との関係という観点から検討した結果、恋歌、季節歌といった和歌の内容により、品詞比率に差があることが明らかになった。

次に、形式について検討した。限られた音数の中での表現が求められる場合には名詞の比率が高いことが指摘されているが、長歌のみを抽出すると、長歌の名詞率は今回の調査結果の中ではやや高い方であった。つまり、和歌の形式からは、音数の制限と名詞率の高さの関連は見られないことがわかった。

さらに、これらの和歌の品詞比率を散文の品詞比率と比較すると、どのような位置付けになるのかを検討した。『日本語歴史コーパス平安時代編』に基づく中古和文14作品の名詞率とMVRと、古今和歌集・平安初期歌合の名詞率・MVRを比較したものが、図2である。図2中の四角囲み部分が、図1の範囲に当たる。これまで「要約的な文章」として、物語・日記所収の和歌と『古今和歌集』詞書・仮名序が挙げられていた。図2からも『古今和歌集』と平安初期歌合の和歌は、会話文や地の文と比較して名詞率が高くMVRが小さい「要約的な文章」であることが見てとれる。和歌の品詞比率はその内容によって異なる様子が見てとれたが、この品詞比率の差は文

章のジャンルを超えるものではないと言える。

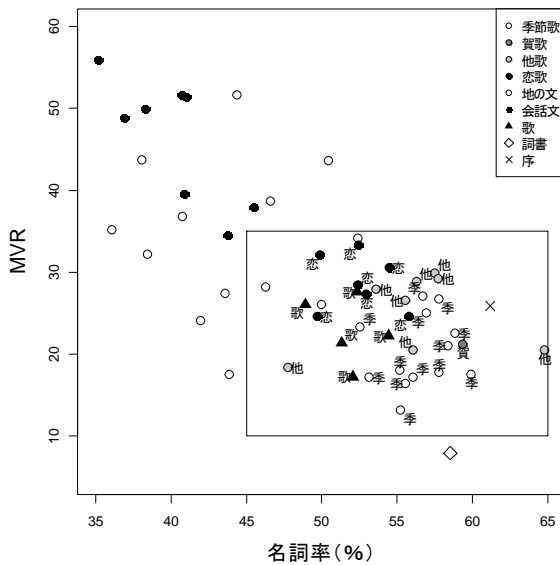


図2 中古14作品と古今和歌集・平安初期歌合の名詞率・MVRの散布図

(4) 歌合日記の語彙の量的構造の解明

中古から中世にかけての歌合は、和漢混雑文が一般化する過程において、和歌の実作に基づき、和歌のあり方や歌ことばの用法について評論が加えられた資料と言える。その中でも歌合中のまとまった散文箇所である日記については、その資料性が明らかにされていない。歌合日記は歌合の記録である。歌合には行事的諸要素がある。例えば、和歌の題や左右の頭、文台、員差の州浜等の調度、衣装、楽舞の曲目等といった事前に定めおく事柄があり、当日の左右方人の集合から始まり、講師・読師・判者が召され、歌の披講があり、評定があり、楽舞の後、禄を賜り、終わる。歌合日記はこれら行事の進行に概ね沿った形で書かれ、起こった事柄も併せて記録される。

「歌合コーパス」に収録した歌合日記のうち、「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」の漢文日記と仮名日記という異なる文体で書かれる2種類の日記を調査対象とし、歌合日記の語彙の量的構造の解明を試みた。漢文日記は記録体、仮名日記は和文体で書かれており、ほぼ同じ内容を2種類の文体で読み比べることができる貴重な資料と言える。歌合日記には割書箇所が多い。割書は語に対する注記もあるが、詳細を文で記すものも多いため、これもあわせて調査対象とした。

「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」日記と中古和文14作品の名詞率・MVRの散布図を図3に示した。長単位データに基づく名詞率とMVRを用い、品詞比率から見られる歌合日記のテキストの特徴は「要約的な文章」として位置づけられる。これまで「要約的な文章」として、物語・日記所収の和歌と『古今和歌集』詞書・仮名序が挙げられてい

た。しかし、図3から、「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」日記は、漢文日記、漢文日記(割書)、仮名日記ともに、より名詞率が高くMVRが小さい「要約的な文章」としての特徴が強いことが明らかになった。ここから、歌合日記が物語・日記・随筆の地の文とは異なるジャンルの文章であることが見てとれる。中でも、名詞率の高さが特徴的である。漢文日記と仮名日記という文体の違いについては、名詞率よりMVR、つまり形容詞類(形容詞・形状詞・副詞・連体詞)と動詞のバランスに現れることが明らかになった。

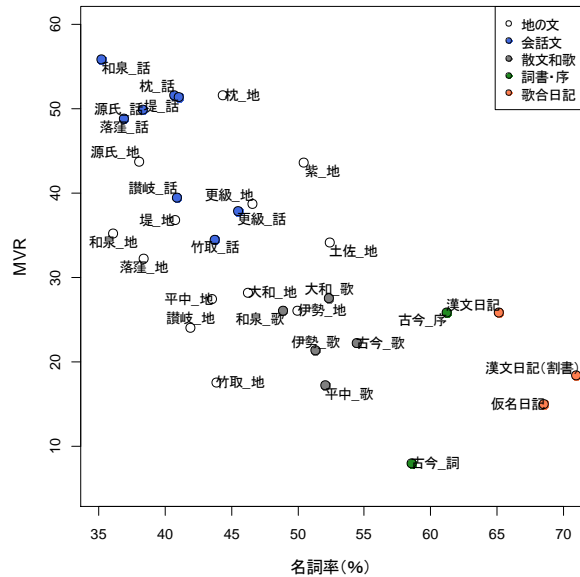


図3 歌合日記と中古和文14作品の名詞率・MVRの散布図

また、「歌合コーパス」に付与した形態論情報と文境界情報を利用して、名詞率と文の長さの関係について検討した。「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」日記の仮名日記、漢文日記、漢文日記(割書)のほか、比較する材料として中古和文のうち名詞率が低いものから『源氏物語』桐壺巻の地の文を、名詞率が中程度のものから枕草子(冒頭3章段)の地の文を、名詞率が高いものから『古今和歌集』仮名序の地の文を用いた。その結果、1文あたりの自立語数は、漢文日記<仮名日記<中古和文となり、1文あたりの自立語数と名詞率の相関係数は-0.718と負の相関が見られた。歌合日記の中で文体の違いについて見ると、漢文日記と仮名日記の差が大きく、漢文日記は文が短い。また、物語・随筆の地の文や和歌集序文と「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」仮名日記は同じ和文体であっても差があり、仮名日記の方が文が短い様子が見てとれる。調査結果から、これまでの指摘とは異なり、文が短いほど名詞の比率が高いことがわかり、語数(音数)の制約や文の長さ以外に、名詞率の増加の要因が存在することが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 富士池優美、中古歌合日記の品詞比率、第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集、無、2015、157-16
- ② 富士池優美、平安時代和歌の語彙の量的構造、文学・語学、有、211、2014、120-129
- ③ 富士池優美、平安初期歌合和歌の品詞比率、第6回コーパス日本語学話0句ワークショップ予稿集、無、2014、21-30
- ④ 富士池優美、中古中世歌合の構造化、言語処理学会第20回年次大会発表論文集、無、2014、205-208

[学会発表] (計3件)

- ① 富士池優美、中古歌合日記の品詞比率、第7回コーパス日本語学ワークショップ、2015年3月11日、国立国語研究所(東京都・立川市)
- ② 富士池優美、平安初期歌合の品詞比率、第6回コーパス日本語学ワークショップ、2014年9月9日、国立国語研究所(東京都・立川市)
- ③ 富士池優美、中古中世歌合の構造化、言語処理学会第20回年次大会、2014年3月18日、北海道大学(北海道・札幌市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富士池 優美 (FUJIIKE, Yumi)

中央大学・文学部・特任准教授

研究者番号：20510572